

上総北西部における古墳終末期の様相

白井久美子

-
- | | |
|------------------------|----------------------|
| はじめに | 4. 8・9世紀の「方墳」と地下式横穴墓 |
| 1. 後期古墳群と方墳 | 5. 初期古代寺院 |
| 2. 7世紀代の前方後方墳 | まとめ |
| 3. 軟質砂岩を使用した複室構造の横穴式石室 | |
-

論文要旨

旧上総国北西部は、上総国府が所在した地である。国府の具体的な位置は未だ確認されていないが、東京湾に注ぐ養老川下流域の北岸に所在することは「倭名類聚抄」の記載や「古甲（古国府）」等の地名によって知られるところである。また、発掘調査によってほぼ全容が明らかになった上総国分尼寺は、大和法華寺に匹敵する規模と主要伽藍をもち、僧寺もまたそれに相応した規模と内容をもつことが明らかにされってきた。

しかし、養老川流域には古墳時代の後期から終末期にかけて上総を代表するような大型古墳がなく、代表的な前方後円墳や大型方墳は、むしろ太平洋側の山武地域や南部の小櫃川・小糸川流域に分布している。この地が律令国家形成期に上総国の政治・文化の中心地になった背景にはどのような状況が考えられるであろうか。このことに注目して、上総北西部の古墳の動態を見ていくと、以下のようないくつかの特徴を見いだすことができる。

1. 古墳時代全般を通じて畿内の中央勢力との交渉に先進的な動きを示し、海上交通を利用して常に新しい文物を受け入れ、また新しい体制に順応している。
2. 集落の発展を背景に成長した在来の首長層は、河川の流域ごとにいくつかの中規模な古墳群を形成し、前期から終末期まである程度の独立性をもって群を維持している。
3. 終末期になると、中・小規模の古墳や後期以降の新興古墳群では「方墳と横穴式石室」を受け入れたにもかかわらず、在来の中心的な古墳には前方後方墳という当時一般には使われていない墳形を採用したり、横穴式石室を全く用いない大方墳群が存在する。
4. 古墳時代終末期以降も地下式横穴墓などの地下式系の埋葬施設をもち、独特な展開を示す「方墳群」が存在し、これらの築造時期は初期古代寺院の造営期とほぼ重なっている。

以上の点から、養老川下流域が上総国の中心地となり得た背景には、早くから旧態依然とした埴輪や飾り大刀の世界から脱却して、先進的な直轄地的特性をもちつつも、初期古代寺院の建立を担うような在来の勢力が存続し、新たな体制に適応した状況が考えられる。